6月 22 日の説教要旨　　「主の道は貧しい人に」　　山本一牧師

詩編２５編１～１４節

●私たちは生きていく中で、「No Choice（選択の余地なし）」という言葉に直面することがあります。特に、八方塞がりの状況や貧困の中で、自らの意思ではどうすることもできないと感じる人々の嘆きは、私たちの心を締め付けます。
詩編 25 編 16 節で詩人が「わたしは貧しく、孤独です」と神に訴える時、それは単なる個人的な窮状に留まらず、不正義の中で声を上げられない人々、そして自らの罪深さゆえに悔いる心をも映し出しています。この詩人もまた、そのような「No Choice」としか言いようのない状況に置かれていたのです。
●しかし、この詩人は絶望に留まりません。彼は「主は貧しい人を導き、その道を教えてくださる」という希望を見出します。世間では「貧すれば鈍する」と言われ、困窮が人を卑しくするという見方が一般的です。しかし、聖書は逆説的な真理を語ります。それは、苦しみや弱りの中にあっても神を信じ、他者への愛と憐れみに生きる者にこそ「主の道」が示されるというものです。特に今日の詩編の後半（12～14 節）では、主を畏れる者に選ぶべき道が示され、その魂は恵みに満たされ、子孫は地を受け継ぐとあります。これは、たとえ社会的な報いが少なくても、天からの恵みがその魂に豊かに注がれることを歌い上げているのです。
●この逆説的な真理を最も完全に体現されたのが、私たちの主イエス・キリストです。イエス様は「貧しい者は幸いである」「悲しむ者は幸いである」と語りかけられました。そして、ご自身がまさにその貧しい者、悲しむ者と共に生きることで、希望に満ちた、神の臨在を深く感じられる交わりを生み出し、それをこの地上に広げていかれました。主の道は、社会の底辺に置かれ、また自らの至らなさに打ちのめされていた人々のただ中にこそ示されたのです。
●教会に集う私たちの宣教の働きもまた、この主の道の延長線上にあります。私たちは皆、多忙な日常の中で貴重な時間を割き、誰かのために奉仕しています。厳しい生活の中から、惜しみなく力と財を捧げてくださる方々もおられます。弱さを抱えつつも誰かへの優しさを示される方もあります。このような小さな働きにこそ、主が共におられ、温かく希望に満ちた信仰の共同体が生まれていることを私たちは実感するのです。今週も、主の道が私たちに一人一人に示され、小さな愛の業に歩んでいけるよう、共に祈りましょう。